

“神戸”という街 ——神戸っ子の空間認識とその気質——

森 理 恵

従来、地理学の分野で都市について論じられる場合、その自然条件や社会・都市構造などの客観的事実から述べられることが多かった。

しかし、地理学を「およそ人間中心的なもの」とするならば、客観的事実から物事を考えるだけでなく、五感によって得られる事象についての考察があってしかるべきであると考えられる。しかし、そのような視点からの研究は過去にはあまり例をみることはできない。本論では近年、地理学にその人間的要素を回復すべく展開されている人文主義地理学を参考にしながら、神戸を事例に、そこに住む人の主観を主体として、客観的な事象からだけでは現れてこない街の姿をさぐり、従来のものとは少し趣を異にする論文を目指すものとする。

神戸を取り上げたのは、私自身の幼い頃からの神戸に対する思い入れが深かったためでもある。主観を主体にもってくる以上、まずは「私」という主観に立ち返り、「私」の中で大きな位置を占める神戸という街に注目した。

そして本来街について様々な視点から考察する際に、そこに人が住まう限り、「住まう者」の主観を無視することはできないという観点にたって、実際に神戸で暮らす人の話から、人はどのように街というものを認識しているのかについて考えていきたいと思う。

神戸市は北は六甲山系の山々、南は古くは“ちぬの海”と呼ばれた大阪湾に挟まれ、南北に短く、東西に細長い地形に市街地が発達している。

歴史的には、明治期の神戸港開港が有名であり、海外、特に西欧諸国の新しい文化がいち早く取り入れられ、現在でもハイカラな街としてよく知られている。しかし、その昔は奈良、平安の頃より東西の交通の要所として大輪田泊、兵庫の津が栄え、一ノ谷・壇の浦などは、歴史の流れを変えたといわれる合戦の舞台として幾度も登場して

いる。また神戸の西の端に位置する須磨も源氏物語に見られるように、平安期には貴族隠遁の地として知られ、明治期以降は多くの文人、俳人が訪れ幾多の詩を詠んでいる。

昭和に入ってから、わずか7年の間に水害と空襲に襲われ街は壊滅状態に陥った。戦後、焼け野原から出発した神戸は、独特の神戸商法から積極的な都市整備事業・都市再開発事業を行い、現在人口約147万人を抱える都市に発展した。その再開発事業のなかでも、「山、海に行く」と言われたポートアイランドの造成事業は、特に有名である。また、オジャレ・エキゾチック・ハイカラといった言葉で表されるように、イメージ的な音の響きはハイ・クラスの都市である。

神戸市が市民の全世帯を対象に隔年に行っているアンケートの調査結果からは、おおよそ騒音・ゴミ・文化施設等に多少の不満は持っているが、緑と海に囲まれた生活環境に満足し、今後も神戸で暮らしていくことを望んでいる市民の姿がうかがえる。これは聞き取り調査からも、同様の結果が得られている。

神戸っ子の空間認識では、兵庫というまちの存在が重要なキイとなっている。そして浮島のようにいくつかの核が散在している神戸の街を、兵庫が影となって結びつけているのではないかと考えることができる。このことは外から見た時はあまり意識されることはない。しかし、行政・経済の中心が兵庫から三宮へと次第に東方に移り変わっていったのに伴い、人々の心理的な重心も東へ移ったと一般には考えられているが、今もなお兵庫は忘れられない存在として神戸の街の中心であり続けるのではないだろうか。少なくともこの地に何十年と暮らし、その変化の様相を目のあたりにしてきた人々にとって、今も昔も兵庫が神戸という街の要であり続けるだろうと思われる。